

— たんぽぽいっぱい

ある冬の日曜日。タツくんは、お父さんとお母さんの三人でお買い物に出かけました。デパートのおもちゃ売場で消防車のミニカーを買ってもらって、それから、みんなでお昼ごはんを食べました。

デパートのいちばん上の階にあるレストランの窓からは、タツくんの住んでいる町がとくまで見わたせます。

朝はいいお天気だったのに、いつのまにか、雨がふっていました。デパートのふもとにある交差点を、いろんな色のかさが行ったり来たりしています。

「わあ、たんぽぽみたい」

タツくんには、かさをもってあるく人たちのようすが、たんぽぽの綿毛のように見えたのです。

「そうだ、タツくんにあたらしいかさを買ってあげなくっちゃ。こわれていたんだよね」

お母さんが、思いだしたように言いました。今までタツくんがつかっていたかさは、古くなって、もう骨がおれてしまっていました。

お昼ごはんがおわると、タツくんは、黄色いウルトラマンのかさを買ってもらいました。デパートを出る時に開いてみると、やっぱりたんぽぽのようすです。お父さんとお母さんも、自分のかさをさして、たんぽぽになりました。

みんなでたんぽぽ、うれしいな。タツくんは、ぴよんぴよんとびはねるようにして歩き

ました。つめたい雨なんか、へっちゃらです。だって、たんぽぽみたいに、ふんわりと空をとべるような気がするんですもの。

すると、本物のたんぽぽの綿毛がひとつ、タツくんのまえをとおりすぎていきました。

「まあ、早いたんぽぽね」

お母さんが言いました。たんぽぽの綿毛は、白くもった空にとけこむように消えていき

ましたが、タツくんたちは、なんとなくあたたかくなったような気がしました。

そつとふきはじめた南風。もうじき、春がやってきます。